



コイ科魚類の稚魚を腹側からみた骨格。矢印の部分に咽頭歯はある。



コイ科魚類の咽頭歯。写真はソウギョのもの。種類ごとに形、数、配列が異なる。

特集

湖辺

水、魚、そして人

東アジアの中の琵琶湖

私は、コイ科魚類の咽頭歯を30年以上にわたって研究してきました。咽頭歯を見ているといろいろなものが見えてきます。コイ科魚類がどのように進化してきたのか、大地がどのように動いてきたのかなど、咽頭歯の持ち主であるコイ科魚類やそのまわりの世界のことが見えてくるのです。人間の活動もまわりの世界の出来事といえます。

コイ科魚類の誕生から現在まで、まわりの世界とどんな関係を持ってきたのかを、咽頭歯の研究だけではなく、いろいろな研究分野の知識を借りて、知りたくまりました。

咽頭歯をもつコイ科魚類が豊かな琵琶湖水系

咽頭歯とは、魚のノドに生えている歯のことです。生えている場所が違うだけで、アゴの歯と同じものです。魚などの下等脊椎動物では、アゴだけではなく、口の中やノドなどいろいろな部位に歯が生えています。

しかし、コイ科魚類は、咽頭歯だけをもち、アゴや口の中に一切の歯をもちません。また、種類によって、歯の形、配列、本数が違ってきます。

そして、琵琶湖とその周りの水系には、19属36種のコイ科魚類がすんでいます。これは日本列島に分布するコイ科魚類の3分の2以上を占めています。

す。その上、この中にはゲンゴロウブナ、ニゴロブナ、ホンモロコ、アブラヒガイなど琵琶湖水系にしか見られない特産種（固有種）がいくつ含まれます。

このような固有種を含む豊かなフアウナ（特定の地域にすむ動物の全種類のこと）が琵琶湖にみられるのは、一つにはこの湖が大きく、さまざまな環境を備えているからでしょう。しかし、単にそれだけではなく、琵琶湖がバイカル湖やタンガニーカ湖と並ぶ世界有数の古い湖であるという点にも関係しているはず。

琵琶湖博物館の総合研究

開館以来10年にわたって、私は館



ニゴロブナ



ワタカ

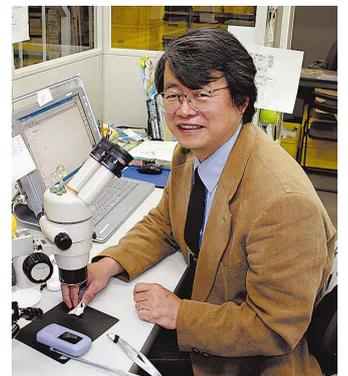


ホンモロコ



ハス

琵琶湖のコイ科魚類（琵琶湖博物館所蔵）



上席総括学芸員 中島経夫 (魚類形態学)



頭部骨格の周囲の泥から水洗選別で検出された咽頭歯。



弥生時代中期の環濠集落跡として知られる守山市の下之郷遺跡から見つかったフナ属のエラぶたを中心とする頭部骨格のかたまり。



内外のさまざまな分野の共同研究者とともに、総合研究「東アジアの中の琵琶湖 コイ科魚類の展開を軸とした 環境史に関する研究」を行ってきました。この研究では、東アジアで多様なグループが分化したコイ科魚類を中心に、いくつかの生きものと自然環境との関係を調査研究してきました。

そしてその一方において、人がコイ科魚類とどのような関係を持ち続けたかを調べようと、確実な証拠が残るここ6000年ほどの期間について、主に琵琶湖やその周辺の地域で研究を進めてきました。

その結果、東アジアの地史の中で、夏に雨の多いアジアモンスーン気候と密接な関係を持ち、いわばこの地域の水の豊かな環境で、コイ科魚類をはじめとする生きものが進化してきたことをある程度明らかにしてきました。

また、日本列島の東北部がサケマス類を主な動物性蛋白源としてきたのに対し、琵琶湖地域から北陸・山陰地方にかけて、縄文時代に、湖や潟などに面した低湿地に拠点を置き、コイ科魚類とくに産卵期のフナ類を捕り、それを保存加工して、定住生活をおくるという文化がみられました。

それから以後、弥生時代には、水田が作り出す一時的水域に来る魚を利用する関係が生まれ、さらに、魚たちの商品化などといった変化があるものの、引き続きごく近年まで、オカズトリの漁や水田漁撈として、

水と魚と人の密接な関わり合いがありました。この関わり合いの中で人間は、文化を作ってきたのです。

総合研究の成果を 紹介する2回の企画展示

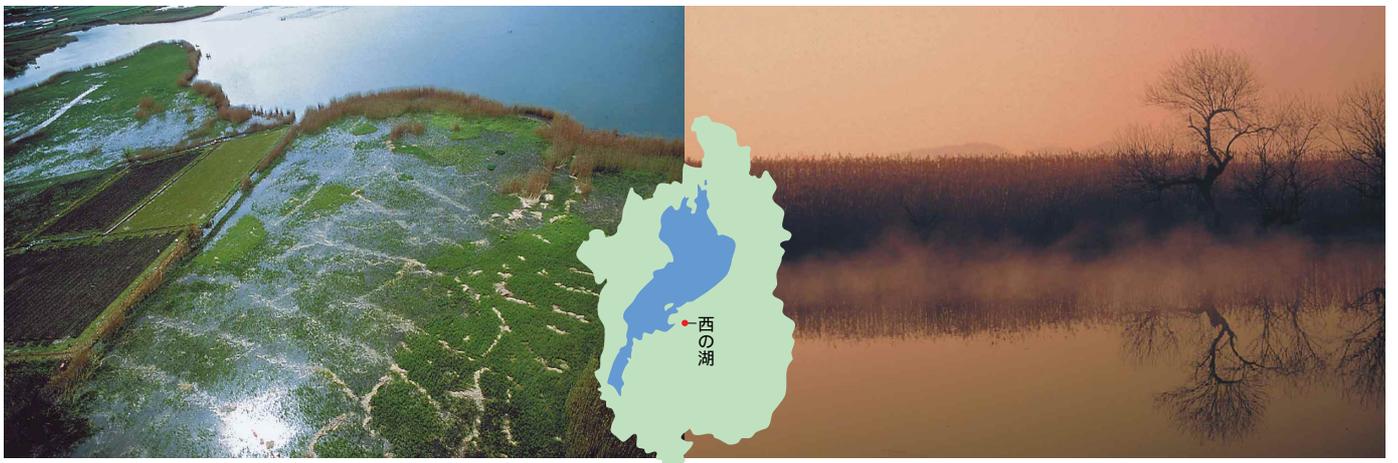
この10年間の総合研究の成果を今年と来年、2回の企画展示として紹介します。

水、魚、人という3者のあいだの関係が、歴史的にどのように変化しながら成立してきたのをお見せし、かなり希薄になっている現在の関係を見直し、今後これらの関係はいかにあるべきかを、皆さま一人ひとりに深く考えていただく材料にしてほしいとの願いからです。

本年度は第1回目として、「湖辺の水、魚、そして人」東アジアの中の琵琶湖」というタイトルで、この総合研究のメンバーである写真家の今森光彦さんの映像作品を中心に、展示を行います。今森さんは、総合研究の他のメンバーと議論をし、その結果もふまえながら映像作品を作り上げてきました。今森さんは、「人」からの視点で、魚を含めた自然とのかかわりを見つめています。そのかかわりを強く見つけた作品を総合研究の他のメンバーも含んで選びました。

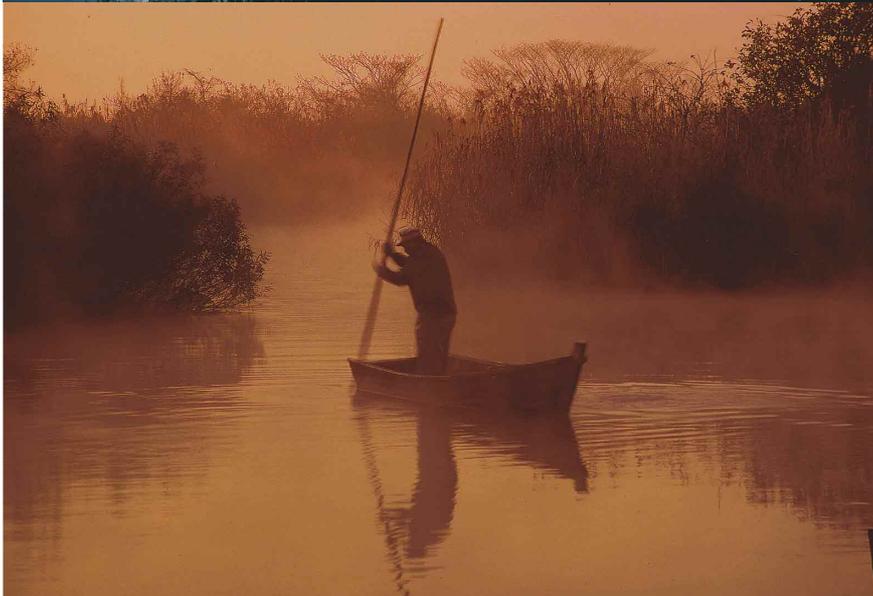
3者の間のこれからのあるべき姿を、皆さまに考えていただき、そして、来年度の企画展示「水、魚、そして人」そのかかわりの歴史」東アジアの中の琵琶湖」をあわせて観覧していただ

右2点とも撮影/今森光彦氏





左3点とも撮影 / 今森光彦氏



いて、今後の思いをより深めていただくための準備にさせていただけたらと考えています。

企画展示「湖辺」の内容

最初の展示コーナーは、総合研究の紹介になります。コイ科魚類が誕生しからの7000万年の歴史を、大きな出来事年表のパネルと展示物によって示します。このコーナーを来年度の企画展示では、あらためてふくらませ展示することになります。また、こ

の研究プロジェクトと今森さんの映像作品がどう結びつくのかを示すとともに、映像の歴史的な背景を解説します。

次のコーナーが、今森さんの映像の展示になります。豊かな水と魚のいる自然、そこでの老漁師の暮らしを映像で展示します。今ではかぎられたものになってしまいましたが、昔は、琵琶湖のまわりで、どこでも見られた風景です。モンドリやタツベでフナやコイを捕る、少しでも多くの魚を捕るために、ヨシ場のゴミ

をさらう、老漁師のまわりには、生きた水が流れています。生きた水とは老漁師の言うきれいな水です。それは純粹で透明な水という意味ではなく、魚をはじめとする豊かな生命を育む水です。

映像展示のコーナーは、二つのサブコーナーに分けられています。メインのコーナーは、水の基本的なサイクルである1年という単位の中に見られる人と自然の関わりを示します。湖辺での老漁師の暮らし、まわりの自然を、季節をおいながら展示します。もう一つのコーナーは、湖辺から水の源へとたどり着きます。湖辺から田、野、森とたどり、そこでの人の暮らし、風景、自然、それらのかかわりを写した写真を展示します。今年と来年の企画展示をおして、水、魚、そして人のかかわりを、これからどうしたらよいかを皆さまとともに考えて行きたいと思っています。

第14回琵琶湖博物館企画展示

湖辺 ~水、魚、そして人~

東アジアの中の琵琶湖

7月15日(土)~11月26日(日)

場所：博物館企画展示室

第15回琵琶湖博物館企画展示

水、魚、そして人 ~そのかかわりの歴史~

東アジアの中の琵琶湖

2007年7月14日(土)~11月25日(日)【予定】

場所：博物館企画展示室

第18回水族企画展示

水辺の生き物

7月15日(土)~11月26日(日)

場所：博物館水族企画展示室